

一、須弥山世界に人間界があり、人間界こそ仏法と巡り会える世界

道元禪師（一一〇〇～一二五三）は、人間の住む世界をどのように考えていたのか。やはり当時の仏教者の多くがそう信じていたであろうインドの須弥山世界観、三千大千世界である。山河大地といふは、山河はたとへば山水なり。大地は此処のみにあらず。山もおほかるべし、大須弥小須弥あり。横に処せるあり、豎に処せるあり。三千界あり、無量国あり。色にかかるあり、空にかかるあり。河もさらにおほかるべし、天河あり、地河あり、四大河あり、無熱池あり。北俱盧洲には四阿耨達池あり、海あり、池あり。地はかならずしも土にあらず、土かならずしも地にあらず。（中略）空を地とせる世界もあるべきなり。（『正法眼蔵』「身心学道」巻、大久保道舟編『道元禪師全集』下、筑摩書房、三七頁。以下、『正法眼蔵』からの引用は「巻名」と頁数のみ記す。）

私たちの世界はこの須弥山世界の南洲（南瞻部州、南閻浮提）であり、南洲こそが仏法が存在する世界であり、仏法と巡り会える世界であると考えていた。

世尊言、南洲有四种最勝。一見仏、二聞法、三出家、四得道。

あきらかにしるべし、この四种最勝、すなはち北洲にもすぐれ、諸天にもすぐれたり。いまわれら宿善根力にひかれて、最勝の身をえたり。歡喜隨喜して出家受戒すべきものなり。（『出家功德』六〇六頁）菩提心をおこさん人、いそぎ袈裟を受持頂戴すべし。この好世にあうて仏種をうゑざらん、かなしむべし。南洲の人身をうけて、釈迦牟尼仏の法にあふたてまつり、仏法嫡嫡の祖師にうまれあひ、単伝直指の袈裟をうけたてまつりぬべきを、むなしくすぎさん、かなしむべし。（『袈裟功德』六三四頁）

この発菩提心、おほくは南洲の人身に発心すべきなり。（『発菩提心』六四六頁）
仏法にあひたてまつること、無量劫にかたし。人身をうるごと、またかたし。たとひ人身をうくるといへども、三洲の人身よし。そのなかに南洲の人身すぐれたり、見仏聞法、出家得道するゆゑなり。（『八大人覺』七二六頁）

そして一方で、次に示すように、世界はこれにとどまるものではなく、広狭・大小に拘わるものではないとし、さらには「今」「ここ」「このこと」を生きる、時空を超えた人生観・人間観・宗教観を示している。

学人おほくおもはく、尽乾坤といふは、この南瞻部州をいふならんと擬せられ、又この一四州をいふならんと擬せられ、ただ又神丹一国おもひにかかり、日本一国おもひにめぐるがごとし。また、尽大地といふも、ただ三千大千世界とおもふがごとし、わずかに一州一県をおもひにかくるがごとし。（『行仏威儀』四九頁）

人もし仏道を修証するに、得一法通一法なり、遇一行修一行なり。（『現成公案』一〇頁）

二、積功累徳する遙かなる仏道を生きる

先に述べたように南洲は仏法に出会える世界であり、三宝に出会ったならば、

すでに帰依したてまつるがごときは、生生世世、在在処処に増長し、かならず積功累徳し、阿耨多羅三藐三菩提を成就するなり。（『帰依仏法僧宝』六六七頁）

と、三宝に帰依し、それを生生世世、在在処処に増長してゆき、かならず積功累徳して、阿耨多羅三藐三菩提を成就するのであるとする。まさに、人間界（南洲）を場とした無窮の仏道が説かれ、その完成としての阿耨多羅三藐三菩提の成就が説かれている。

道元禪師おける人間とは、生生世世にわたる遙かなる仏道を歩みながら、釈尊に一步一步近づいていく存在であるということが出来る。

三、大智禪師発願文：道元禪師の門弟、寒巖義尹が撰述しその教えを受けた大智祖継が受用

願わくは、我れ此の父母所生の身を以て三宝の願海に回向し、一動一静法式に違せず、今身より仏身に至るまで、その中間に於て、生生世世出生入死、仏法を離れず。在在処処、広く衆生を度して疲厭を生ぜず。或は劍樹刀山の上、或は鍍湯爐炭の中、唯だ是れ正法眼蔵を以て重担と為して、隨処に主宰とならん。伏して願わくは、三宝証明、仏祖護念。

この、初期曹洞宗僧団に伝承され受用された発願文に、道元禪師の人間観・仏道観が如実に示されていると私は考える。（『キーワード：道元・人間観・南洲・積功累徳・遙かなる仏道』）